

### 3章 文化の変革と、教会の歴史

この章で私は、ただ単に、社会における教会の役割の「歴史」を語ろうとしているわけではありません。私が記そうとしているのは、「神の物語 (His Story)」、つまり、神が世界を御自身と和解される働きの記録なのです。本章で私は、歴史、すなわち、神の物語の背後に働かれる神の御手（初代教会における素朴で寛容な奉仕の業から、文化に大きな影響を与えた 19 世紀の宣教とリバイバルの業に至るまで）をご紹介します。これから皆様と一緒に見ていくのは、教会が実践してきたキリストの愛が社会変革をもたらし、社会の思想、信仰、行動様式にまでも影響を与え、何世紀もの間、世代を超え、「もしもイエス様が市長だったら」起こるような文化的変化を起こしてきた、そのような物語についてなのです。

教会はその歴史の殆どの期間、社会と文化の変革が自らの使命の不可欠な一部であることを自覚していました。しかし、もしかしたら、あなたの周りの教会の方々は、もはやこのような確信を抱いていないかもしれません。また、あなたご自身も、その方々に同意なさるかもしれません。もしそうであるなら、過去の世代の教会が、どのように同時代の世界に大きな影響を与えてきたかを知るとき、あなたの認識は変えられることでしょう。御言葉を読むと、イエス様はただ人々に教えられただけではなく、良い業を実践されながら巡回されたことが分かります。イエス様の時代からすでに、伝道と社会的奉仕の業は切り離すことのできない関係にあったのです。

歴史、つまり神の物語を知るということは、単に知識を学ぶことに留まりません。歴史を知ること、私たちは現代の教会が持っている大いなる可能性に目が開かれるのです。この物語は、神と隣人を愛した人々の物語であり、各時代にあって、地の塩であり世の光であった人々の物語です。信仰による私たちの先祖たちが紡いできたこの物語は、私たちが相続した大きな遺産です。これは、私たち教会の物語です！

#### 教会史???

神学生時代、私は教会史にあまり興味がありませんでした。

見回せば、どこにでも差し迫った社会的な必要を見つけることが出来ました。私にとって教会史は、何か見当違いで時代錯誤なものに見えました。しかし私は間違っていました！

今日の教会は、過去の教会から学び、恩恵を受けることが出来ます。神がその御計画を達成するために、歴史の中で、どのようにご自身の教会を用いてこられたのかを現代の教会リーダーたちは学ぶ必要があります。そう、過去の教会から私たちが学ぶべき点は数多くあるのです・・・

## 初代教会

初代教会のキリスト者たちは、すぐにでも救い主が再臨されると信じ待ち望んでいました。彼らは信仰と情熱と愛に満たされ、自らの持ち物を進んで他者に分け与えました。彼らのそのような「惜しみなく人に施す生き方」は、深い影響を与えました。未信者がそのような行いを見たり、実際にキリスト者から助けられたりするだけでなく、このような信者たちの謙虚で犠牲的な献金に支えられ、伝道の業の必要が満たされ、福音宣教が前進していました。2世紀および3世紀の教会は、北アフリカ、アラビア半島、インドへと広がり、5世紀の終わりには古代ギリシャ・ローマの全世界に福音を伝えました。

寛大で犠牲的な施しが初代教会の特質でした。2世紀の教会指導者であったコンディアヌスの助言に耳を傾けましょう。

**「神ご自身が叫んでおられる。あなたのパンを割いて必要な人に与えなさい。言葉を伝えるために訪問する必要はありません。その人に与えるために訪問しなさい。言葉で彼を満足させる試みをやめなさい。彼は食べ物と飲み物を必要としているのです。」**

初代教会のもう一つの特徴は、何千もの信者たちが味わった迫害と処刑でした。にもかかわらず、教会は成長しました。事実、この時代の教会の在り方と、教会の人間観が、古代ローマ全体を変えてしまったのです！

### 初代教会はどのようにして古代ローマを変えたのか？

イエス様は3世紀前に、10名あまりの弟子たちに対し、全世界に「あるメッセージ」を届けるようにと命令を与えました。彼らはそれを行ったのです。少数派で、迫害され、批判され、拒絶され、人々に罵られたこの120名のグループが届けた「メッセージ」を用いて、神はローマ帝国を変えられたのです。事実この変革は、過去2000年間の西洋の歴史における、最大の文化革命であったと言われていました。

イエス様はこの少数の弟子たちの群れに、聖霊によって力を与えられ、整えられ、励まされ、大胆さを与えられるまでは、エルサレムで待ちなさい、とも命令されました。彼らはそのようにしました。そして教会がその産声を上げました。神の民を通し、神ご自身がお働きになりました。昔も今も、神が働いておられるからこそ教会が世界に影響を与えることができるのです。しかし、人間側の要素を検証すること、すなわち、社会にあればほど大きな影響を与えることを可能にしたキリスト者たちの信念、思想、行動から学ぶこともまた、私たちの助けになります。

社会学者のロドニー・スターク氏が、初代教会と当時起こった社会変革の関連性を分析しました。彼が発見したのは、初代キリスト者の小さな群れは、「人間性」というものに対するまったく新しい概念を当時のローマ社会に導入したということでした。とりわけ、初代教会が大切にしていた7つの信条とその実践がローマ社会に、そしてついには全世界に大きな影響を与えました。スターク氏は史実に基づく統計や当時の文書を調査し、この7つの信条と実践（「人間性」に関するまったく新しい概念）を発見しました。

1. **キリスト者は、ご自分のことを愛する人々を愛してくださる神をもっていた。**

異教の世界の人々は生まれて初めて、ご自分を愛するものを愛してくださる神がいる、ということを知りました。この神は、ローマの神々とは全く違っていました。異教の神々は、それぞれに利己的な計画を持っていました。彼らの神々は互いに争い合い、支配権を奪い合うことに多くの時間を費やしていました。神々は自らを礼拝する人々に殆ど関心を払わず、人々が神々の祝福を受けるには、捧げ物や儀式などの形をとった賄賂を差し出さなければなりません。キリスト者たちの信じる、ご自分を愛する者たちを愛してくださる神というのは、彼らの神と正反対でした。

2. **キリスト者が信じていた神は、ご自身を愛する者たちに、すべての隣人を愛するようにと命じていた。**キリスト者の神は、全人類を愛する神でした。その神は自らの支払った犠牲によってその愛を明らかにされました。その神は、ご自分を愛する者たちにも、他者を愛し、他者に仕えるようにと指示を与えました。これは革命的なことでした！異教徒であったローマ人たちは、自分の家族、または同じ階級の人、あるいは政治的、経済的に利用する価値がある人のみを愛していました。対照的にこの「新しい」神は、信者たちに大切な次の教えを与えられました。「私があなたがたを愛したのだから、あなたがたもそのように愛しなさい。血縁がなくても、階級や政治的立場が違って、利害関係が一致しなくても愛しなさい。また私はあなたがたに、貧しい人、傷ついた人、社会的に低い身分にある人々を特に愛して欲しい。」

3. **キリスト教は民族と階級を超越する文化を持っていた。**キリスト教徒は民族や階級によって互いを隔てあいませんでした。それは、ローマの文化とは大違いでした！キリスト者の高い階級の人が、キリスト者の奴隷を「兄弟」と呼ぶのを見てローマ人たちは驚きました。当時の教会は、それ以前のローマの文化には存在しなかった人間関係の構図を作り出したのです。

4. **キリスト者たちの神は、憐れみ深いお方であり、人にもまた憐れみ深くあることを求める神であった。**キリスト者たちは、憐れみの神を信じていました。この憐れみの神は、その信者たちにも他者に対して憐れみを施すようにお求めになる方でした。異教のローマにおいて、人々の生活に憐れみは殆ど見られませんでした。ローマの生活は逆に、残酷さが常態化していたことで有名です。ある皇帝は息子の14歳の誕生日のお祝いに、闘技場で剣士を戦わせ、殺し合いをさせました。彼は息子が大人の男に

なる前に、血を流して人を殺すという「男らしい」行為を見せておきたかったのです。当時のローマの歴史記者たちは、クリスチャンたちが憐れみ深く、特に貧しい人々にそうであった、と冷ややかに書いています。彼らには、貧しい人々に対する憐れみと配慮がキリスト教の教義と実践の核心であった理由を理解することができませんでした。

5. **キリスト教徒の男たちは、自分自身を愛するように妻を愛するよう期待された。**

「男たちは自分の妻と子どもを愛するべきである」というキリスト者の主張を、ローマ人たちは嘲笑しました。ローマ人の男たちは、妻と子どもの所有者でした。子どもは彼らの所有物なので、自分の子どもに対してどんなことをしても許される、と彼らは考えていました。彼らは、法律の咎めを受けることなしに子どもを殺すことさえ出来ました。キリスト教という新宗教は、男たちは自分自身を愛するように妻を愛するようにと教えました。これは過激な考え方であり、行動でした。

6. **キリスト者たちは、ローマの慣習であった墮胎と間引きを拒絶した。**キリスト教

は、ローマでは普通に行われていた墮胎と間引きを拒否しました。あるローマの兵士が戦場から妊娠中の彼の妻に宛てて書いた手紙にはこう記されています。「(私が家に帰るまでに) 子どもが生まれたら、男の子なら生かしておき、女の子なら処分するように。」ローマの下水の遺跡からは、おそらく望まれない女の子たちと思われる沢山の赤ちゃんの骸骨が見つかっています。新しい宗教、キリスト教では、障がい者も、胎児も、男も女も、奴隷も貴族も、全ての命は等しく神聖であると考えられていました。

**キリスト者は、自分自身を危険にさらしてまでも隣人を愛した。**キリスト者たちは、自分たちと違う信仰を持っている隣人をも愛するべきだという教えを持っていました。ローマでの日常生活には困難が伴いました。貧しい人々は町から離れた不潔で狭い区画で生活していました。今にも崩れそうな家は狭すぎて、彼らは自分の寝る番が来たときだけ交代で帰宅していました。水道もトイレもなく、排泄物は窓から外に投げ捨てられていました。この狭く不衛生な区画に深刻な病気が発生すると、瞬く間に蔓延しました。伝染病の流行により、多くの命が奪われました。愛と慈善を信仰の行いの中心としていたキリスト者たちは、伝染病が大流行する中、憐れみと慈善の奉仕を行いました。キリスト者たちは死を恐れてはいませんでした。彼らは死が終わりではないことを信じていました。反対に、ローマの異教徒たちには病人たちに奉仕する理由は何一つありませんでした。医者でさえも、可能な限り伝染病の蔓延地域から逃げようとしたのです。その地域に残った人は、感染している可能性があるともみなされました。家族が伝染病に感染した場合、彼らは感染者を家から追い出し、路上で息絶えるのを待ちました。しかし、キリスト者たちが自らの手を汚して提供する看護、食べ物、水にありつくことさえ出来れば、感染した人々には生き残るチャンスが残りました。社会学者のロドニー・スターク氏は歴史的資料に基づき、キリスト者の愛と慈善の奉仕によって、伝染病の大流行時にキリスト教が成長した可能性が高いという仮説的ケース・スタディを考案しました。

以上をまとめると、キリスト者たちが持っていた「人間というものに対する新しい視点」が人を強く惹きつけ、多くの人々を信仰に導いた、ということが出来ると思います。この「人間性に対する新しい視点」は、教会によって組織化されたプログラムといった可視的なものではなく、むしろ信者たちの日常生活に息づいていたものでした。

数字の成長が示す以上に、キリスト教は社会に影響を与えました。西暦 40 年のクリスチャンの数は 1000 人、6000 万人と言われていたローマの人口の、たったの 0.017 パーセントに過ぎませんでした。スターク氏によると、西暦 300 年の時点で、クリスチャンの数は 630 万人にまで成長しました。それでも全人口の 10.5 パーセントです。決して大きな割合ではありませんでしたが、その影響力は甚大でした。西暦 313 年には、コンスタンティン帝は、キリスト教が合法であると宣言し、教会を迫害、蔑視することを禁じました。彼とその後継者たちはその後も教会に対する好意的な政策を推し進めました。西暦 381 年には、キリスト教は国教であると宣言されました。ついに「異教のローマ」が公式に「キリスト教国」ローマになったのです。

西暦 392 年に、ローマ帝国はキリスト教を国として支援し始めました。教会と国家の協力体制が深まるということ（それは、ローマ帝国の旗印の下に世界を支配し変革しようとする試みでした）は、初代教会が謙遜で素朴な奉仕の行為から離れ、大きく方向転換することも意味していました。

## ロドニー・スターク氏の 仮説的ケース・スタディー

伝染病の流行時に、どのようにキリスト教は成長したのか。

（太字の比率がどのように変化するかに注目してください。）

■設定：ローマでの伝染病の流行時  
互いに面識ある 5 人のローマ人がいました。

（4 人が異教徒、1 人がキリスト者）

1 人は街から逃げました。

（3 人が異教徒、1 人がキリスト者）

4 人が伝染病にかかりました。

（3 人が異教徒、1 人がキリスト者）

3 人の異教徒たちは家族に見捨てられました。この残された 3 人の異教徒と 1 人のキリスト者を、他のキリスト者たちが面倒を見ました。

（3 人が異教徒、1 人がキリスト者）

■結果

2 人の異教徒は看護の甲斐なく死んでしまいました。1 人の異教徒は生き残り、キリスト教徒も生き残りしました。

（1 人が異教徒、1 人がキリスト者）

多くの場合、キリスト者の愛の奉仕の結果、異教徒はキリスト教に改宗しました。

（0 人異教徒、2 人のキリスト者）

■伝染病流行前後の比率の変化

伝染病の流行前：異教徒 4 人、キリスト者 1 人

伝染病の流行後：異教徒 0 人、キリスト者 2 人

\*2 人の死んだ異教徒も、死ぬ前に改宗していたかもしれません。

その方向転換は必ずしも神から来たものではありませんでした。それにもかかわらず、「歴史＝神の物語」の次の世代においても、引き続き神は教会をお用いになりました。神はどんな時代にもそうなさいます。

## 中世における教会と社会の変化

初代教会における霊的改心の結果生まれたものが慈善と奉仕でした。意識的な隣人への奉仕の業は、キリスト教徒の生き方の標準でした。私たちが中世と呼ぶ時代に、キリスト者の奉仕の動機は次第に変化していきました。この時代の伝道と社会的責任は、もっぱら組織としての教会という文脈においてのみ行われると理解されていました。ローマ法王を最高位とする当時の教会組織は、教会以外に人間が神の恩寵を受ける道はない、と教えていました。その主要な教義は、魂の救いを獲得することを目的とした善行と禁欲主義でした。神がご自身の御計画を遂行するために、教会と国家が存在すると考えられていました。

教会による慈善活動によって、地域の失業者、孤児、やもめ、けが人、病人、災害被災者、貧しい人々は救われました。聖トマス、イグナティウス・ロイヤラ、聖パトリック、そしてアッシジの聖フランシスなどの中世の有名な宗教家たちに代表されるように、貧しい人々への施しは、この時代も教会の主要な関心事であり続けました。

4世紀から8世紀にかけて、修道士たちによってなされた実践的な信仰と奉仕の業は社会の他の分野にも影響を与え、他の国々へと広がりを見せました。ネストリウス派は小アジア、アラビア、インド、中央アジア、中国まで広がり、ケルト派はアイルランドから出発し、スコットランド、イングランド、中央アジアに広がりました。ベネディクト修道士たちはヨーロッパに留まりました。彼らは旅を続けながら、日々の祈りと働きの拠点となる修道院を各地に建てました。意図せずして、それらの修道院は労働に関する先進的な規律を広めました。それまで、労働は奴隷がするものだと考えられていたのです。

5世紀になると、ローマ帝国は北から攻め込んできた蛮族によって征服されてしまいました。ヨーロッパ中の図書館は破壊され、燃やされ、何千もの古の遺跡が失われようとしていました。5世紀のアイルランド人たちはキリスト教に触れ、文字の読み書きが出来るようになったばかりの状態でしたが、多数の文書を保護し、それらを手で書き写すことによってヨーロッパの文化遺産を救いました。彼らは大きな修道院をいくつも建設する一方で、ギリシャ語、ヘブル語、コプト語の書物を探し求めました。ヨーロッパ中が蛮族の支配下に置かれるなか、図書館が破壊され閉鎖されてしまった時、アイルランドの修道院に保存された書物は非常に貴重な宝物になりました。その後、アイルランドの修道院は保管した

文書をヨーロッパに返還しました。新しく指導者になった者たちが修道士たちに子どもたちの教育を任せると、ヨーロッパ中に修道院や学校が溢れました。実際ある学者は、それらの修道院によって再びヨーロッパに教養が取り戻されていなければ、その後、中世ヨーロッパはイスラム化していたであろう、と記しています。また他の歴史家は、修道院を「無秩序の荒野の中の耕された園のように、野蛮な社会においてキリスト教文化を植え付け保護した、信仰のパン種」と述べています。

中世の後期には、アッシジの聖フランシスが貧しい者の尊厳を主張し、社会制度そのものを再構築しました。貧しい農奴たちは、彼が数十万もの人々とともに創造した新しい秩序の中に組み入れられ、封建制度そのものに大打撃を与えました。ある評論家はこう書いています。

ヨーロッパの封建制度の骨組み全体が寄りかかり甘えていた政治的定説は、アッシジの貧しく小さな男の、愛と呼ばれる不思議な力によって、完全にひっくり返された。封建制度は倒れ、民主主義が始まった。それまでの社会が完全に解体され、以前より純粋で、強く、自由な社会が残された。

中世が終わりに近づく頃、教会と社会は大きく変わろうとしていました。中世の間も、神は確実にご自身の物語の中でその働きを継続しておられました。

## 宗教改革期における教会の影響力と実践

スイス、ドイツ、オランダにおいて、神は教会と宗教改革を用いて社会を変革なさいました。1517年、マルチン・ルターがヴィッテンベルグ城のドアに95箇条の主張を貼り付けたのを皮切りに、宗教変革は始まりました。彼は特に、教会建設の財源となっていた免罪符の販売に抗議しました。この時期、教会は明らかにひどく腐敗していました。彼は初代教会の純粋さに立ち返るようと警笛を鳴らしたのです。ルターはローマ書、ガラテヤ書の研究によってローマ国教会との相違点を明確にしていきました。「ただ恵みにより、ただ信仰により、ただ御言葉により。そしてただ主にのみ栄光を返す」という彼の教義は、当時のローマ国教会の信条と慣習に対する挑戦状でした。

ルターは善行が罪を帳消しにするとは信じていませんでしたが、だからといって、貧しい者の世話をし、世界の光となるというクリスチャンの責任が軽くなるとは考えていませ

んでした。彼は、二つの王国があると教えました。神の国と、この世の国です。クリスチャンはその双方に関わるべきだと彼は考えました。ルターは各教会に共同基金を設立しました。牧師たちは説教の中で、信徒たちが貧しい人々に仕え、持ち物を人に分け与えるようと教え、教会の執事たちは良識的な指針の下に共同基金を困窮した人々に分配していました。

一方、スイスの宗教改革者ジョン・カルヴァンは、教会は社会の中に存在する「小さな社会」であり、やがて来る全く新しい世界秩序の新芽だと考えていました。カルヴァンは貧しい人々に対するクリスチャンの責任について頻繁に語り、実践しました。1550年代にフランスから60,000人の難民がジュネーブに押し寄せてきたとき、カルヴァンは教会に根ざす民間団体を創立し、それはヨーロッパ全土で援助団体の模範になりました。その働きは、実に多岐に渡る人々の必要に応え、病人、孤児、高齢者、障がい者、旅人、老人、その他の社会的弱者、また死に至る病の人々に仕えました。貧しい人々への支援は、職業倫理とも結びついて行きました。教会の執事たちは、職業訓練、一時居住施設、商売を始める道具一式など、貧困問題に対する持続可能な解決策を見出し、援助に値する貧困とそうでない貧困を区別するように整えていきました。

実際、神はヨーロッパ全土を覆う社会変革の只中で、多くのクリスチャンの指導者たちをお用いになりました。彼らはヨーロッパの教会および社会の変革に尽力すると共に、貧しい人々に対するより効果的な支援方法を開発することに貢献したのです。

### リバイバルを通して教会が社会に与えたインパクト

17世紀から18世紀にかけては、福音派によるリバイバルが世界を揺り動かしました。罪人に魂の救いを説くだけでなく、その行いを改めるようにとのリバイバル運動の呼びかけは、ヨーロッパおよびアメリカの社会に大きな影響を与えました。リバイバル運動は教会を刷新し、何千と言う霊的新生の実を結び、崩壊する社会を再構築し、プロテスタントの福音宣教運動の火種となりました。ジョン・ウェスレーが導いたリバイバルはそのような宣教運動の中の最も重要なもののひとつでした。このリバイバルにより、英国は大きく変革しました。それ以前は、英国は西洋諸国の中でもっとも腐敗し、道徳的に退廃した国のひとつでした。女性や子どもは強制労働で虐げられ、社会には不道徳がはびこっていました。大英帝国の強欲が奴隷制度に拍車をかけ、人類史上最大の人身売買が行われていました。ウェスレーから始まったリバイバルによって聖書的世界観が導入されると、英国に大規模な文化的変革が起こりました。



ジョン・ウェスレーは伝道者であり説教者でしたが、彼が語った福音は、キリスト教徒の社会運動家たちにも影響を与えました。ある歴史家は、このリバイバルは英国史上、他のどんな社会運動にもまして民衆の道徳観に影響を与えた運動であり、もしもこのリバイバルがなければ、1789年から1795年にかけてフランスが経験した血みどろの革命と同じことが英国にも起こっていた可能性があるかと述べています。

ウェスレーは少人数の友人たちと共にオックスフォードで「ホーリー・クラブ」を設立しました。信仰を持つ政治家であった彼らは、社会的不正に立ち向かうという志の下、何年間もこの集まりを継続しました。彼らはそれぞれのメンバーの専門分野ごとに、課題を割り振り、幅広い霊的、社会的プロジェクトを実行しました。大英帝国の奴隷制度を廃止させたあのウィリアム・ウィルバーフォースの努力もそのようなプロジェクトのひとつでした。他のメンバーたちも、刑務所制度、国会、教育の制度、植民地に対する英国の責務（特にインド）、識字教育の徹底、児童労働の禁止、工場法の制定、紛争の解決、アルコール中毒への対処、賭博、不道徳、動物を使った残酷なスポーツ、精神病患者への差別の禁止、保育師制度の導入、煙突の清浄化、貿易同盟の締結、貧しい人々への教育、鉱山で働く女性や子どもたち、スラムの子供たちへの配慮、工場内の環境改善、スラム街への学校設立など、幅広い事柄に取り組みました。日曜学校の創始、YMCA、救世軍、聖書刊行会、教会宣教会（Church Mission Society）などもこれらの取り組みの結果として生まれました。彼らの信仰は力強く、実践的でした！

ジョン・ウェスレーのモットーは、仲間たちの指針となりました「出来るだけ多くの場所で、考え得る限りの方法で、あらん限りの時間で、手の届く限りの人々に対して、出来るだけ沢山の良い業を行おう。その命が尽きるまで。」

英国の政治家ウィリアム・ウィルバーフォースは、イギリスでの奴隷制度廃止を推進するために神に用いられました。ジョン・ウェスレーを霊的父親と仰いでいたウィリアム・ウィルバーフォースは、自身の信仰に基づき政治的意見を主張しました。ウィルバーフォースが英国議会で初めて奴隷制度を廃止する法案を出したとき、彼は事実上孤立していました。彼はその法案を30年以上提出し続けました。年を重ねるに従って、少しずつ彼の法案に賛成する議員が現れてきました。それと時を同じくして、ウェスレーリバイバルがイギリス全土に広がりつつありました。最終的に、彼の提出した法案は可決されました。ウィルバーフォースは特に政治的な分野で役割を果たしましたが、英国の世界観と文化に影響を与えたのは教会の成長、およびその信仰者たちの、変えられた生活様式と考え方でした。その変化によって、ウィルバーフォースの奴隷制度廃止の情熱が実現したのでした。

最後に、福音宣教運動は大西洋を渡り、合衆国で起きた最初の二つの霊的大覚醒に火をつけました。二番目の大覚醒の後には、プロテスタントのほとんど全ての宗派の教会が社会福祉の充実、女性の権利の拡大、奴隷制度の廃止、禁酒法の導入、刑務所の改修、公共の教育機関の設立、世界平和の実現などの諸課題に関わるようになっていました。福音伝道と社会的関心は切り離されることなく相互に作用しながら働いていました。受けた祝福を自国だけに留めず、アフリカ、アジア、ラテンアメリカまで運び届けるために、多くの宣教師たち、聖職者たちの新しい波が起こされ、彼ら、彼女らは福音伝道と社会変革の必要性を講壇から語るだけでなく、自らがその開拓者となっていきました。

### プロテスタント宣教運動が文化に与えた影響

19世紀の海外宣教師たちは、医療器具一式と農作物の種を、聖書とともに手荷物の中に入れるのが常でした。彼らはガーナにコーヒーとココアを運び届け、タイでは天然痘、マラリア、ハンセン氏病を撲滅し、コンゴで強制労働問題に取り組みました。また中国ではアヘンの貿易をなくすことに取り組み、人間に足かせをする習慣や、女の子の間引きの慣習と戦いました。インドでは、彼らはやもめを燃やす風習、墮胎、寺院での売春、カースト制度と戦いました。また彼らは井戸や学校を建設しました。事実上すべての宣教運動が、今日我々が「開発」と呼んでいるものに携わっていました。教育、健康、農業、弱者や虐げられたものたちに対する社会の意識向上に取り組むことは彼らにとって、福音を伝えることの一部でした。

イギリス人のウィリアム・ケアリは、キリスト教の社会変革者たちの努力によって、イギリス、ドイツ、スイス、オランダに社会変革がもたらされたことを見聞きしていました。それらの国々に対して神がなしてくださったのなら、地上のどんな場所においても、神には同じことがお出来になるはずだ、とケアリは考えました。ケアリはインドに移り住み、インドは彼の家になりました。そこで彼は、インドを変革するために驚くほど幅広い方策を繰り広げました。彼は宣教師であり、植物学者であり、社会起業家であり、経済学者であり、人道的医師であり、新聞印刷の先駆者であり、農業の専門家であり、翻訳家であり、インドの40の異なる言語で聖書を出版した人物であり、教育者であり、天文学者であり、図書館建設の先駆者であり、森林保護運動家であり、女性の権利を主張する社会運動家であり、公僕であり、道徳の再建者であり、そして文化の変革者でした。

2000年間、インドのヒンズー教、および仏教の指導者たちは、運命決定論的な人生観を啓発してきました。今生きている人間の魂は、前世に犯した間違いの罰としてこの地上に送られたのであり、人生とはすなわち苦しむことである、と人々は教えられていました。しかしウィリアム・ケアリは、創造者は人間の人生を良いものにしたいと願っておられる、

とインドに教えたのです！変革は起こりました。そして、それは人々にとって望ましい変革でした！

19世紀に派遣されていった他の宣教師たちも、霊的改心に焦点を当てながらも、同時に遣わされた先々で物質的、社会的、文化的問題に対する慈善活動に取り組みました。

- ハワイへの宣教師たちは福音伝道をすると共に、島の人々を貿易商社、船乗りや、商人たちによる経済的、性的搾取から守りました。
- デイビッド・リビングストンは、アフリカに福音を届けたいと願うと同時に、アフリカの孤立した村落の経済的発展と地域開発に対して関心を抱き、行動を起こしました。
- 朝鮮半島と中国で活動した「女性聖書協会」は、教会成長に寄与するとともに、自国における女性の社会的地位向上に大きな影響を与えました。
- ある民俗学者が、ブラジルの2つの農村を比較調査しました。ひとつは宣教師たちによる福音伝道と指導、地域奉仕の影響を受けた村、もう一つは土着の伝統的宗教を信じ続けている村でした。前者の村はほぼ全ての領域で成功し繁栄していました。後者の村は、ほぼ全ての領域で衰退していました。
- 19世紀、インドのケララにおける最も突出した特徴は、「教育の復興運動による、前近代から近代への社会変革」でした。ロンドン宣教会は、この地域に宣教師を送り、女学校を設立する先駆的働きをしました。彼らの意図はただ教育することだけではなく、女性をその低い社会的地位から立ち上がらせることにありました。

世界が果てしない苦しみの中にあるようにとは決して願われない創造者が、福音を届ける神の民による「福音の実践」を通して、ご自身の愛と憐みを世界に現されるということは、なんと理に適っていることでしょうか！

## 結 論

教会は、キリスト教の名の下に自らがなしてきたすべてを誇ることはできません。十字軍による侵略、宗教裁判、プロテスタントとカトリックの間のイデオロギー紛争なども、教会がしてきたことです。教会は悔い改めなければならないようなことを沢山してきました。しかし、たとえそうであったとしても、教会は「歴史＝神の物語」において重要な役割を担い続けてきました。教会は長い間、福音には人の人生と社会の在り方を変革する力があると信じていました。マイケル・グリーン博士はこのように書いています。

教会が前進してきたのは、「良き知らせの宣言」によるものではなかったのか？ペテロ、パウロ、オリゲネス、サボナロー、ルター、ウェスレー、ホイットフィールド、J. エドワ

ーズ、ウィリアム・テンプル、マーチン・ルーサー・キング等はキリストについて語るこ  
とによって、人々の心を動かした。しかし、彼らの「良き知らせの宣言」には例外なく社  
会的な意味合いが含まれていた。・・・我々が立つべき唯一の真の福音とは、生ける神との  
個人的な出会いに根ざし、必要を抱えた人々に対する熱烈な関心という果実が証拠として  
伴うような福音である。(下線著者)

ひょっとして皆さんは、何故この章は19世紀中頃までで止まってしまっているのかと  
不思議に思われるかもしれません。また何故、現代では文化の変革における教会の役割に  
ついて殆ど耳にすることがないのかという疑問を持たれたかもしれません。「ある出来事」  
によって、教会が分断したのです。第7章で、その「ある出来事」について詳しく説明い  
たします。この出来事後、保守派の教会は、社会を変革してきた教会との歴史的つなが  
りを部分的に断ち切ってしまいました。また新しく現れたリベラル派の教会は、霊的改心  
への熱い心を部分的に失ってしまいました。

神は大きな御計画を持っておられます。そしてその御計画～破れを修復し、個人と社会  
を変革し、もしイエス様が市長であったなら起こるような変化をもたらすという御計画～  
を実行するように教会に命じられました。「歴史＝神の物語」の中で、キリスト教会は社会  
と文化の変革における重要な役割を果たしてきました。今日、全世界でキリスト教会に大  
きなムーブメントが起こりつつあります。現代の教会は、霊的、文化的変革という自らの  
役割を再び理解しつつあります。この後の章で、皆さんは「21世紀の社会変革者」たちが  
活躍する神の物語を読むことになるでしょう。